

駅

笹原実穂子

ホームに降り立つと、昔と変わらない駅があった。隅にはだるまストロブが赤々と燃え、皆に暖を取らせているのではと、目を凝らして見たが、だるまストロブがあったそこには、新しい切符の自動販売機が二つ並んで白く点滅しているだけだった。駅前から三本目の道路の向こうにその家はあった。こんなに近かったのだろうかと表札を見る。薄くなった墨が微かに黒田と読める。木造二階建てだが、朽ちる寸前のかろうじて建っている家構の様子だった。格子ガラスの引き戸の横のプザーを押す。指が震えて定まらない。もう一度強く押してみる。ガラスに人の影が映り、「となたですか?」と男の声がした。「はい、私NPOから来ましたヘルパーです」「そんなの家では頼んでないが変だなあ」

「ボランティア団体です。こちらのお宅で大変困っていらつしやるご連絡が来てました」キーンと嫌な音がして引き戸が開けられた。髪は七三分けであるが、顎に無精髭が伸びている男は、私を胡散臭そうに上から下から見ているが、中年にさしかかっている私の姿に何んとなく安心をしたのか「そうですか、どうぞ」と部屋へ通した。雑然としていた。兄の部屋はこちらですと居間の隣を指し示すが、そこに行くまでに、色々置かれていた物を何回もまたがなければならなかった。ただ大きな立派な机が窓側にあり、専門書らしい本が一分の隙もなく整然と並べられて、今まで書き物をしていた様子がかがえた。

「兄は七ヶ月前に脳出血で救急車で運ばれ、幸い軽く、軽い半身不随と言語障害があるけれども、ゆつくり話して伝えられます」「悟兄さん、入るよ、ヘルパーさんだよ」「こんにちば」

私はせいっぱい笑顔を作ったつもりだったが、顔が引きつっただけだったかもしれない。彼はベッドの横に置いてあるテレビの方に顔を向け、なんの反応も示さなかった。私は息を呑んだ。髪が真つ白だった。顔も青白く生氣はなかった。頬もつけている。私はベッドのそばに駆け寄り「何でもしますよ、言つて下さいね」涙声になるのをなんとか押さえた。私はそれでも鍋や釜は台所へ、新聞は束ね、本は本棚、衣服はダンスへとしまい、隣の居間を座れる部屋にした。山とあるこびりついた食器類を力を入れ洗い、三回洗たく機を回す。居間の大きな机を見ると昆虫の本ばかりだった。確か弟は北大に行ったはずだった。昆虫博士になったのだろうか。リングをジュエリーサーにかけて、ようやく悟の部屋に行くことが出来た。「悟さん、ジュースを飲みましょうか?」ストローは吸う力が弱くなっている。スプーンで一匙一匙口に持つていく。それでも半分はあごの下でタオルに落ちていってしまう。私は横を向いて、慌てて涙と鼻を拭いた。「アレルギーで、涙や、鼻水がすぐく出てしまつて……」

悟は急に顔を横に振り、スプーンを飛ばした。赤い顔になり、「よし、よしお」と叫び出した。弟が部屋に来て、「ヘルパーさん、ちょっと席はずして、おしつこのようだからさ」「はい、車椅子に乗せますか?」「いや、尿瓶でいいから」

「一週間に一回来るヘルパーにはなんともなくおしっこ取らせか来ない?」もどつて来て不思議そうにして毎日だったのを、週に一回にしたのですよ。なにかとうるさくて、研究のじゃまになるから」だから、これだけ部屋中汚れていたと分かった。食事の後、顔を熱いタオルで拭いた。眉毛の一本一本も、落ち込ん

だ目も、横に垂れてしまつた口元も大事に大事に拭いた。弟が入つて来た。「もうすく兄は眠るので……」「そうね、帰りますね」弟は来た時とちがひ、感謝の目を私に向けている。悟は、私と決して目を合せず、そつぽを向いていた。

私はこの町のホテルに泊まつた。ホテルの部屋の中は、七十年代のようなベッドや調度品だつた。それは私に、そしてこの町にふさわしい。シャワーを浴びるとベッドにすべり込んだ。白い天井に悟の顔が浮かぶ。さつきシャワー室の鏡に映つた私だつて、三十年前とは違つている。悟があればど変わつていても、それは自然の摂理と自分に言い聞かせ、強く目を閉じた。

二月の末の水点下十度の夜だつた。凍てつく空には氷りつゝいたような星も天にあつた。悟とスナックで飲んだ後、いつものように私を家まで送つてくれた。私はこの三月で短大を卒業し、母校に就職が決まっていた。悟はその日いつもより寡黙だつた。私がしゃべつても虚ろな返事はかりが返つて来ていた。この町は夜も一時を過ぎると一人も通らない。

「僕、東京へ行くことにした。横浜に親戚がいて、マンションを持つている。そこに僕は一時預かりさ。そこから予備校へ通うことになつた」

空にちりばめられている星に言うように、悟は上を向いてそれだけを言った。それはまた私の別れの言葉でもあつた。悟の胸に顔を埋めて私は泣いた。だが待つているという言葉は言えない。悟は国立大学を三浪していた。追われるように切羽つまつているのが分つた。悟を愛していた私は決して言えなかつた。悟は私を抱きしめ、ただ熱い口づけを何度も何度もするだけだつた。そんな若い二人だつた。

その後私は、決まっていた母校への就職を電話一つで辞めて、東京へ行つた。だが悟には連絡をせず、私が横浜に行ったのは、上京してから十年もたつてからだつた。その頃悟は四浪をした後、故郷に帰つてゐるとの同期生の風の便りだつた。

目が覚めると枕が冷たく濡れていた。きつとまたあのときの夢を見たのだろう。帰りにスーパーで買ったお弁当を朝食に食べると、一分でも早くと悟の今にも壊れそうな木造の家に向かつた。

「おはようございます。悟さん」今日は少しだけ気持が明るいようだと弟が言う。昨日と同様テレビだけを見ている。食事の半分はタオルが吸う。それでも口を開けてくれる。車椅子せつかくあるのだから、その辺少しだけ散歩してはどうかしらと弟に言う。悟があればだした。弟がなだめに行く。皆に見られるのは絶対嫌だと言つている。サングラス掛けて、深い帽子をしても駄目？ と聞いても、嫌だと大丈夫な左手を激しく振り出した。分かつたわ、二人でいましょう。私はそれが幸せよと思わず言つてしまい、慌てて悟の顔を見るが、無表情のままだつた。私は弟さえよかつたら、ここに住み込んで看病をしたかつた。こんな形だが悟のそばに居れる。三十年たつてようやく一緒に居れる。どんな姿になつても好きなものは好きだつた。今日も熱いタオルで顔を拭き、「もう帰るね、明日また来るわね」と言つてベッドを離れようとすると、悟がゆっくり何かを言つてゐる。顔を近づけると、「さ・え・き・あ・り・が・と・う。」

「さるとる……」私は偽名を使つてこの家に入つていた。山本と名乗つていた。

「し・あ・わ・せ・だ・つ・た。あ・り・が・い……。も・う・く・る・な・さ・え・き。し・あ・わ・せ・に・な・れ・ほ・く・の・ね・が・い。」

悟は初めてこつちを向いて私を見つめていた。